

08

August
2024

[月刊] キリスト教書評誌

本の

HON-NO-HIROBA

ひろば

ISSN 0286-7001

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2024年8月1日発行(毎月一回1日発行)第800号



出会い・本・人

神の国は今、ここにある 関野祐二

特集シリーズこの三冊!

日本語訳聖書の歴史を知るためのこの三冊!

吉田 新

本・批評と紹介

カール・バルト著/加藤常昭、楠原博行訳

説教と神の言葉の神学 牧田吉和

F・H・バーネット著/脇 明子訳 秘密の花園 斎藤惇夫

柴崎 聰監修 あらすじで読むキリスト教文学 上林順一郎

ロバート・バークレー著/リシア・キニンゲ編/中野泰治訳

真のキリスト教神学のための弁証 岩井 淳

田中利光著 ユダヤ慈善の近代化 金澤周作

荒井克浩著 無教会の変革 小林孝吉

濱 和弘著 傘の神学Ⅰ 普遍啓示論 阿部善彦

長田栄一著 神と共に生きる 鎌野善三

◆ 既刊案内

◆ 書店案内



改革教会の信条と展開

袴田康裕 著

現代日本において信条教会を形成する可能性と
意義はどこにあるのか？



キリスト者が教理を学ぶ意味と喜び、
ウエストミンスター信条翻訳の歴史と課
題、教会的拘束力などの問題をはじめ、同
信仰告白の「結婚と離婚」や「合法的戦
争」といった現代的課題までをわかりや
すく解説。改革派長老派教会のみなら
ず、すべての日本の教会に重要な論文・
講演6篇を収録。

● 四二判・並製・220頁・定価2,860円

既刊好評発売中！

改革教会の伝道と教会形成

袴田康裕 著

● 四二判・並製・218頁・定価1,980円

改革教会の伝統と将来

袴田康裕 著

● 四二判・並製・216頁・定価1,980円

地方伝道の 稀有な通史



岐阜キリスト教史

日本伝道覚書

水垣 清著 金城学院大学キリスト教文化研究所 監修

仏教の盛んな岐阜・飛騨の農山村に、キリスト教はどのように伝えられたのか？ 濃尾
大震災、神社参拝問題、戦時下の幾多の困難にもかかわらず、教派を超えて牧師・宣教
師・信徒たちがつないだ熱意と愛の伝道の記録。

● A5判・上製・340頁・定価4,290円

叢書・改革教会の神学2 災禍において改革された教会

その祈りと告白、実践の歴史と現在

カルヴァン・改革派神学研究所編

新しい時代へ、開かれていく教会！



「たえず神の御言葉によつて改革される」
教会は、直面する危機にどう応えるか？
パンデミックや戦争、震災下の歴史に学び、
世俗化、多様化が進む世界で未来を探る。
多彩な講師によるリレー講座の講演・対談
を収録。

● A5判・上製・274頁・定価3,960円

既刊好評発売中！

叢書・改革教会の神学1 カルヴァンと旧約聖書

カルヴァンはユダヤ人か？

カルヴァン生誕500年を記念して、全国で開かれた講演や説教を収録。カ
ルヴァンの旧約聖書解釈の他にも、当時のジュネーブの出版事情や、教会にお
ける音楽や建築、倫理の問題など、多岐にわたる主題を取り扱う。

● A5判・並製・220頁・定価3,300円





神の国は今、ここにある

関野祐二

「会社には、伝道のため行くのだ」。大学卒業後そのまま神学校へ行くとの道が閉ざされ、五年の約束で就職した身には、在学中繰り返し聞かされたことばが呪縛となった。伝道のたいせつさは分かるが、競争の激しい半導体産業に遣わされ、結果を出さねばならぬ環境で、仕事に積極的意義を見出せないのは辛い。キリスト者の仕事観とはこんなものなのか、答えが出ないままともかくも開発製品を世に送り出して退職、神学校へ入学した。水を得た魚だったが、件の認知的不協和は未解決のまま卒業し牧師職に。ほどなくして出会ったのが、後藤敏夫『終末を生きる神の民——聖書の歴史観とキリスト者の社会的行動』

(いのちのことば社、一九九〇年。改訂新版二〇〇七年)であった。百ページにも満たぬブックレットだが、大衆伝道で強調される「天国行き福音」がこの世での営みに価値を置かない悲観的終末論に基づいており、むしろ今ここに神の国を先取りして地に足のついた活動をし、その結果を終わりの日に完成

する神の国へと持ち込む積極的終末観こそ、聖書全巻が求める生き方であることを明確に教えてくれ、心が震えた。そこには、仕事はもちろん芸術や趣味、福音派が重んじて来なかった社会的行動に至るまで、聖書のグラントナラティブに定位させるパスベクティブと世界観があった。

さらなる確信の深まりは、ポール・マーシャル『わが故郷、天にあらざ——この世で創造的に生きる』(いのちのことば社、二〇〇四年)との出会いによる。タイトルと副題が内容を言い当てているが、世への恐れ、世にある立場、世への応答、世にある務め、世への希望という五部構成で、帯には「仕事、アート、遊びすべてが創造的!」とのことばが躍る。ライフワークの天文学は、主の創造のみわざを讃える手段というよりそれ自体に価値があり、喜び楽しむ自分を主は喜んでくださるのだ。日々の営みすべてに意義と輝きを与える本。得難い宝である。

(せきの・ゆうじ 聖契神学校校長)



▼シリーズ この三冊！

日本語訳聖書の歴史を知るための この三冊！

吉田 新

(よしだ しん・東北学院大学文学部総合人文学科教授)

聖書の言葉が他の言語・文化圏に伝えられる際、必ず翻訳という実践が必要になります。さまざまな言語に移し替えられることによって、人々は聖書の教えを理解し、信仰へと導かれました。それゆえ、一九世紀に来日したプロテスタントの宣教師たちが最初に取り組んだのは、聖書の日本語訳でした。日本語訳聖書に関する書物は、決して多くはないものの、その中には長く読み継がれている珠玉の良書がいくつもあります。たとえば、日本キリスト教

史の大家である海老澤有道による『日本の聖書―聖書と訳の歴史―』（講談社）は、キリシタン時代から大正改訳までの聖書翻訳の歴史を俯瞰しています。門脇清と大柴恒の『門脇文庫日本語聖書翻訳史』（新教出版社）は、門脇が生涯を通じて蒐集した日本語訳聖書の書誌と共に、簡にして要を得た解説を加えています。そして、近年では、内村鑑三の研究で有名な鈴木範久による『聖書の日本語 翻訳の歴史』（岩波書店）は、日本語訳聖書の歴史を平

易に解説しています。「日本語訳聖書の歴史を知るためのこの三冊！」といえば、右記の三冊を紹介すれば十分といえますが、今回は、さらに深く知するために次の三冊を紹介します。

① 高谷道男、有地美子共訳、岡部一
興編『ヘボン在日書簡全集』 教文館
二〇〇九年

日本語訳聖書の立役者の一人といえ
ば、ジェームス・カーティス・ヘップ
バーン（ヘボン）の名がまずあげられ
るでしょう。周知のように、明治元訳
を生み出した翻訳委員会（翻訳委員社
中）の中心的人物です。本書には、彼
が一八五九年七月一九日に日本に向か
う船上で書き記した手紙から、日本を
離れ、死の一年前、一九一〇年八月二
六日に日本に送った手紙までが取めら
れています。この書簡集では彼の派遣
元であるアメリカ長老教会に送った手

紙が大半を占め、そこには聖書翻訳に
関する報告が随所にみられます。ヘボ
ンは聖書の日本語訳を始める前、まず、
和英辞典『和英語林集成』の編纂に取
り組みました。なぜ、すぐに聖書翻訳
に着手しなかったのでしょうか。一八
六六年九月四日付の手紙にはこのよう
にあります。「辞書編纂こそ正しい出
発点と申せましょう。これなくしてま
た日本語の十分な知識なくしては、聖
書を翻訳する十分な資格に欠けるとこ
ろが多いのです。」聖書の翻訳をする
ために、日本語の学習、言葉集めが必
須とヘボンは考えたからです。ヘボン
らの聖書翻訳の訳語の多くは、『和英
語林集成』に含まれる語句と共通する
ことから分かるように、この辞書が
あつてはじめて日本語訳聖書は生まれ
たのです。約七年の歳月を費やし、一
八六七年、ヘボンは『和英語林集成』
を世に送り出します。その後、ヘボン

と彼の同労者であるS・R・ブラウ
ンは一八七二年になってようやくマルコ
とヨハネ福音書の日本語訳を刊行しま
す。このように、この書簡集にはヘボ
ンが聖書翻訳を取り組む際、どのよう
な問題に対処したのかが詳細に記され
ており、翻訳作業の息づかいが感じら
れます。日本語訳聖書の黎明時代の様
子が直に伝わってきます。この書簡を
傍らに置きながら、明治元訳やそれ以
前の分冊を読むと、また違った味わい
があるでしょう。現在では入手困難で
すが、S・R・ブラウンの書簡集、高
谷道男編訳『S・R・ブラウン書簡集
―幕末明治初期宣教記録―日本基督教
団出版部を併せて読むと、翻訳当時の
様子がより明瞭になります。

② 川島第二郎『ジョナサン・ゴープ ル研究』 新教出版社 一九八八年

近代日本のキリスト教の歴史上、先

のヘボンはよく知られた人物ですが、
ジョナサン・ゴープルの名を知る人は
どれほどいるでしょうか。ゴープルは
日本国内で初めて日本語訳聖書を刊行
した人物です。ヘボンらに先立って、
一八七一年にマタイ福音書の日本語訳
を公にしました。S・R・ブラウンは、
一八六六年七月二日付の手紙でゴープ
ルについて次のような言葉を記してい
ます。「バプテスト宣教師と称する
ゴープル氏は、宣教師というほどの人
物ではありません。(略) 聖書翻訳者
として、自分ではたいそう自負してい
ますが、十分な教育がありません。彼
は無学な民衆と、いつもいっしょにい
るので、かなり適任だと、自分では考
えているようです。ギリシャ語もヘブ
ル語も読めません。」このように、
S・R・ブラウンばかりでなく、彼と
その翻訳に向けた当時の宣教師たちの
厳しい言葉が、その後のゴープル訳の

評価を決定づけてしまいました。そのため、彼の翻訳はこれまでほとんど顧みられることはなかったのです。しかし、本書の著者である川島第二郎による精緻な研究により、ゴープルの翻訳はS・R・ブラウンが評したような稚拙なものではないことが明らかになりました。ゴープル訳は最新の本文批評研究を反映したものでした。その訳文は文語体も含んでいますが、主として口語体であり、彼は高い教育を受けていない一般の読者、いわゆる庶民でも理解できるように、易しい日本語で訳そうと試みたのです。先の明治元訳の訳文は、漢文訓読調の文語体であり、漢語や漢文の素養がある読者を重視しています。しかし、ゴープルは平易な日本語で訳すことにとつて、誰もが分かる聖書を日本人に提供しようとした。現代の翻訳学の用語を用いて説明すれば、ゴープルは目標テキストと

その受容者を最大限意識した受容化（同化）翻訳を試みたといえるでしょう。このような翻訳方略は、ゴープル訳から約一〇〇年後に試みられた、日本聖書協会による共同訳のそれと部分的に響き合うものがあります。日本語訳聖書といえば、ヘボンらの翻訳に目が向きがちですが、ゴープルの働きとその翻訳も決して忘れてはいけない一面であることを教える好著です。ゴープルと同じくバプテスト派の宣教師であったネイサン・ブラウンの聖書翻訳も、分かりやすい日本語で訳しています。川島第二郎の解説付きの『ネイサン・ブラウン訳「志無也久世無志與」覆刻版』（新教出版社）もぜひ手に取っていただきたいです。

③ 金成恩『宣教と翻訳 漢字圏・キリスト教・日韓の近代』東京大学出版会 二〇一三年

東アジアの近代キリスト教史全体から日本語訳聖書を捉えようと、また違った視点で私たちに与えられます。日本語訳聖書が中国語訳聖書から大きな影響を受けていることを鑑みるならば、東アジアの他の翻訳と日本語訳とを比較することが必要です。本書は、中国、日本、朝鮮におけるキリスト教の宣教活動と翻訳の関係を説き明かした意欲作です。とりわけ、日本最初のキリスト教の週刊紙『七一雑報』の文体の変遷を探究した考察が興味深いです。当初、『七一雑報』の編集部は婦女子を讀者層に想定したため、記事の文体を漢字平仮名交じり文とすることを旨としたが、漢字片仮名交じり文の投書が多くなり、この二つが混在します。「こうした文体の混在は、平易な文章でも多くの人にキリスト教的な文明開化思想を啓蒙することを目指す編集部と、漢字片仮名交じり文で信仰の表現



『ヘボン在日書簡全集』

岡部一興：編
高谷道男、有地美子：訳
教文館
2009 年刊
A5判 560 頁
7,920 円

を知的に行おうとする日本人読者との間の緊張関係を背景にしているとは考えられないだろうか」（八八頁）と問いかけます。平易な文体にするか、硬質な文体かという問いは、明治元訳の翻訳作業においても議論になったことです。平易な文体を求めるヘボン、ブラウンら宣教師と漢文訓読体を主張する日本人補佐者たち（奥野昌綱、松山



『ジョナサン・ゴープル研究』

川島二郎：著
新教出版社
1988 年刊
B6判 386 頁
3,520 円

高吉、高橋五郎）との対立は、しばしば語られています。補佐した日本人はみな、漢学の素養があり、漢籍に親しむ社会的階層（士族）の出身でした。彼らのような社会的階層に訴える文体でなければ、日本でのキリスト教宣教において支障をきたすと思いつたのでしょうか。どの文体で訳すかという問いは、いかなる社会層に訴えるか、ひ



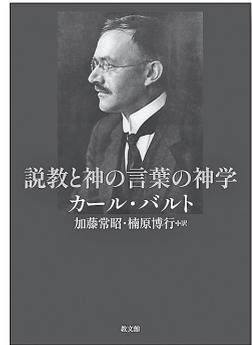
『宣教と翻訳 —漢字圏・キリスト教・ 日韓の近代』

金 成恩：著
東京大学出版会
2013 年刊
A5判 216 頁
5,940 円

いてはどのような宣教戦略を練るべきかという問いへとつながっていきます。宣教と翻訳は切っても切れない関係にあることを改めて教えてくれる内容です。また、中国、日本、朝鮮の視点から「神」の訳語問題を捉えなおそうと試みた近著、金香花『神と上帝 聖書訳語論争への新たなアプローチ』（新教出版社）も合わせてお勧めします。

バルト神学の原点がここに！

〈評者〉 牧田吉和



説教と神の言葉の神学
カール・バルト著
加藤常昭、楠原博行訳



本書は、小さな書物である。しかし、訳者の一人加藤常昭が本書で繰り返し訴えるように、必読の書である。評者も、神学に携わる者にとって、そして何よりも説教者にとつて必ず読むべき書であると確信する。決して分かりやすい書ではない。しかし、根本的に問われ、深く考えさせられる、重い書である。

本書にはバルトの二つの講演が収められている。一つは「キリスト教会の宣教の困窮と約束」（一九二二年六月 加藤訳）、今一つは「神学の課題としての神の言葉」（一九二二年一〇月 楠原訳）である。本書のタイトル『説教と神の言葉の神学』は本書の中心内容を明示する適切な書名である。二つの講演はすでに『バルト著作集1』で訳出されている。本書では、原文の趣を忠実に伝えることよりも、原文を解きほぐした訳が意図されている（一〇〇頁）。本

書の出版の意味もそこにある。

二つの講演は、「危機神学」・「弁証法神学」の端緒となつた『ロマ書』第二版（一九二二年）後に、ゲッティンゲン大学改革派神学教授に就任して間もなくなされたものである。本書を読む時、「危機神学」・「弁証法神学」と呼ばれた意味が良く理解できる。

これらの講演によつて、バルトの神学の原点はまさに「説教」の問題であつたことがわかる。どのよう説教を作ることか、の問題ではない。どうしたら説教することができるのか、という根源的問題である（二九頁）。説教者は「困窮」の中に立たされる。一方では、人間の生の未曾有の矛盾と問題性、他方では新しい謎として立つ、未曾有の聖書のメッセージ。両者の狭間で、語らねばならぬ、しかし、語るができない、という説教における出

口のない「困窮」の状況。この「困窮の中から、救出を待つ大いなる望みを抱いて叫ぶ叫び」（二二―二六頁、他に二八頁）こそ、神学の課題そのもの。神学体系の問題ではない。この出口のない状況と問いとを表現することこそ神学の課題そのものである（二五頁）。この意味において、神学は、われわれが立つことができない「数学的点」、「視点」、「一種の「欄外注」とも表現される（一六―一七頁）。このような「困窮」を理解するのであれば「危機神学」と呼ばれる理由も判明する。第二講演は、第一講演をより神学的に整理されて語られている。「弁証法神学」の意味も明確に理解できるであろう。

問題は「危機神学」や「弁証法神学」への知的興味の問題ではない。バルト自身もその立場にとどまったわけでは

ない。キリストの恵みの圧倒的勝利を語るようになり、「欄外注の神学」から進んで「教会教義学」への道に至る。問題は、何が原点だったのか、という点である。それは説教者が神の言葉を語るとはいかなることかを根源的に問うたことである。これはどのように説教を語るか以上に核心的問題である。本書によって読者が迫られるのはまさにこの問いである。バルトに反対する人も、この問いから逃れてはいない。そしてこの問いからこそ神学も始まるのである。本書が加藤常昭の最後の仕事となったことは象徴的である。本書こそ加藤の原点であり続けたのだと思う。それゆえ、日本の教会に残した加藤の遺言としての意味も持つであろう。

（またた・よしかず 日本キリスト改革派福音教会牧師）
（B6判・一七四頁・定価一九八〇円・教文館）



地の塩となる 教会をめざして

袴田康裕*編



「日本のかたち」が変えられていくなかで、イエス・キリストを主と告白するキリスト者と教会は、社会とどう向き合い、どのように関わればよいのか。

関連書

平和をつくる教会をめざして
世の光となる教会をめざして

四六判・上製

定価 [本体 3,200 + 税] 円
ISBN978-4-86325-099-4



株式会社 一麦出版社

札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL (011) 578-5888

<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

新訳『秘密の花園』を読む

〈評者〉
斎藤惇夫



秘密の花園

F・H・バーネット著
脇明子訳



教文館から脇明子さんの訳された『秘密の花園』が刊行され、早速拝読しました。『秘密の花園』というタイトル

が聞こえており、いささかの胸の痛みも覚えながらの読書と相成りました。

を見るだけで、どうしても覗いてみたくなる癖が私にはあるようです。近年のものでは福音館書店の猪熊葉子訳、岩波少年文庫の山内玲子訳、いずれも、すらりと物語にはいつていくことができ、もうこれで十分と思っではいたのですが、ついつい読み始め、一気に読み終えました。本の造りが美しく、ジェニー・ウィリアムズの挿絵も、読者の想像力を自由にはばたかせてくれる抑えた調子で描かれ好感が持てるのですが、何と言っても、少女期からこの物語を愛してやまなかつた脇さんの、この物語を自分の言葉で読んでみたいという熱い思いが文体に結晶した、丁寧でやさしく美しい翻訳に魅了されました。しかも、読んでいる間ずっと「私のこと忘れていたんじゃない？」という囁き

一九五八年、岩波少年文庫の一冊として、吉田勝江さんの訳でこの物語が紹介され、私は抄訳でない『秘密の花園』を初めて読みました。一八歳の時でした。当時、世界文学全集などを片端から読んでいた私にとっては、なかなか、ちよつと恥ずかしいような、それでいてなんとも懐かしく、『ハイジ』を小学生の頃夢中で読んでいた感覚に大層近いところで読みふけり、ひそかに、いつか、自分の手で秘密の花園を作ってみせるぞと、決意したようです。

やがて福音館書店に入り、『ピーターラビットのおはなし』を編集していた時など、古ぼけたシャベルの柄にとまるコマドリ（一六ページ）から、この物語の主人公メアリを秘密の花園に導くコマドリを思い出し、どうしても会い

たくなってイギリスに出かけたほです。

物語の構成はいたって単純です。植民地のインドで、やれパーティー、やれ夕食会と現を抜かすメアリの母親と、出産の直後に亡くなった妻への思いと、背中への病が息子コリンに遺伝していると思いきみ世界を旅している父親、要するに育児放棄をしている母と父を持ち心閉ざした女の子と男の子が、コマドリに導かれ閉ざされていた『秘密の花園』を発見し、二人を支える友人たちの力を借りながら、自分たちの手で見事な花園を再生させることによって、心を回復していく物語です。と書いてしまえば、いかにも大時代的な設定なのですが、ひよっとすると、今や、他ならぬ私たちがメアリの母親であり、コリンの父親なのではあるまいか、実は、子どもたちが、自然や人間を実体験

できないような仕組みの中に、今、子どもたちを放り出しているのが私たちではないのか、と気付くと、物語は俄かに緊迫感をもって迫ってきます。それほどに、再生されていく花園は生き生きと描写され、回復されるべき子どもたちの心は、心理学や医学では遠く及ばないほど具体的に微細に正確に描き出されていることに愕然とするのですが、それこそ、私たち自身、自分の『秘密の花園』を求めるときも、思い出すことも、怠ってきたせいではあるまいか、と思えてくるのです。古典の、古典たるゆえんでしょう！「私のこと忘れていたんじゃない？」という囁きは、どうやら私の放り出したままの「秘密の花園」から聞こえてくるようです。

(さいとう・あつお 児童文学者・幼稚園園長
四六判・四四四頁・定価二二〇円・教文館)

ヨベルの新刊・既刊・重版案内

岩本遠億
聖霊は愛を完成する

ルカ福音書説教集 2

「目から鱗」第二弾！
フルート奏者・紫園 香氏 *イエスの声が聞こえてくる。*息づかいまで聞こえる。イエスの体温が伝わってくる。*イエスの姿がビジュアルに迫ってくる。*

最新刊！ 新書判・二〇〇頁・一三三〇円

岩本遠億の本 どこまでも寄り添う神を語る！
366元気が出る聖書のことば
あなたはひとりではない 7版出来！

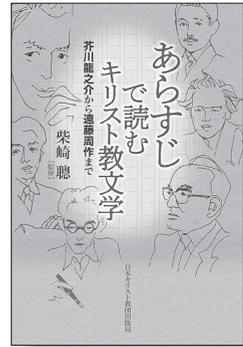
聖霊の上昇気流 神は見捨てなかった
神はあなたの真の願いに答える
ルカ福音書説教集 1

1,320円 1,980円 1,980円

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
出版の手引き / 呈 (税込)

『あらすじ』は、先に読むか、
それとも後で……

〈評者〉上林順一郎



あらすじで読む
キリスト教文学

芥川龍之介から遠藤周作まで

柴崎 聡監修



ある日曜日、教会員から「週報にその日の説教のあらすじ」を載せてほしい」と、要望されました。「説教は全体で説教です。あらすじは説教ではありません」と断りました。しかし「説教の前にあらすじを読み、その上で説教をしつかりと理解したい」と言われ、また別の人も「説教を聞いた後であらすじを読んで、その日の説教の内容をもう一度受けとめたい」と言われました。翌週から「説教要旨」を週報に掲載することにしました。心の中で「説教は生ものだ！」と、つぶやきつつ……。

このたび『あらすじで読むキリスト教文学——芥川龍之介から遠藤周作まで』が出版されました。これは月刊誌『信徒の友』の2011～2012年の二年間にわたって連載されたものの書籍化ですが、あらためて「キリスト教文学とは？」との課題を視点に置きつつ編纂されています。監

修者である柴崎聡さんは巻頭で「キリスト教文学とは何か」について、次のような「ゆるやかな定義」を示しています。

「キリスト教文学」とは、「作者がキリスト教徒でない作家・詩人であったとしても、その文学的発想や営為の根柢に、キリスト教や聖書があり、そこからのメッセージと融和し、あるいは格闘しながらも、それに捕らえられ促されて表出する魂の文学である」とし、その「魂の文学」に触れるための入り口として『あらすじ』を味わい、そこから作品の深みへと進んでいくことを期待しています。

「ある秋の夜半の南京の〈売笑婦〉（売春婦）少女金花の部屋。彼女は貧しい家計を助ける為に夜々部屋に客を迎えていた。……金花の部屋に今年の春、若い日本人旅行家が訪問した。……話題は壁の十字架に向かう。彼は、覚束ない支那語で『お前は耶蘇教徒かい』と金花に問う。『ええ、

五つの時に洗礼を受けました』。会話は続く。『そうしてこんな商売をしているのかい』『この商売をしなければ、阿あ父とう様も私も餓え死をしてしまいますから』『しかしだね、――しかしこんな稼業をしていたのでは、天国に行かれないと思やしないか』。十字架を眺めながら金花は、『いいえ』と答え、『天国にいらつしやる基督様は、きつと私の心もちを汲みとつて下さると思ひますから』と答える。それを聞いた日本人旅行家は反応に窮するのであった(62頁63ページ 芥川龍之介『南京の基督』、あらすじ執筆・宮坂あ覺)。

あらすじは漢字で「粗筋」とか「荒筋」と書き、「大雑把な筋書き」のことですが、英語では「synopsis」で、ギリシヤ語の *syn* (一緒) と *opsis* (見る) の合成語が

月曜日の復活

塩谷直也



キリスト教伝道者に向けて書かれた一冊。説教を準備する上で著者が大切にしていることや、説教者が一週間で経験する心の動きなど、「説教」に苦しみあえぐすべての人に贈る、深い慰めのメッセージ。
四六判並製・128頁・定価1540円

「説教」終えて
日が暮れて

信仰生活ガイド 全8巻



「信徒の友」記事を書籍化する、信仰生活入門シリーズ第2弾。認知症や介護、高齢者施設、さらには葬儀の備えも含め、十数名の著者が多角的にわかりやすく解説。
四六判並製・128頁・定価1540円

山口紀子編

《第2期第2回配本》

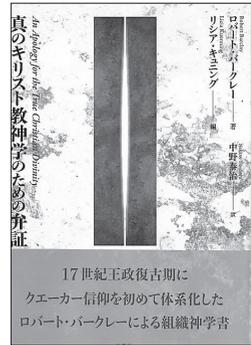
語源とされています。直訳すれば「共観」とか「共感」になるでしょう。あらすじは原著への「共観」や「共感」を呼び起こすものなのです。
さて、本書の『南京の基督』のあらすじを読み、急いで原著を読みました。読み終えてから本書の「作者略歴」、「背景と解説」、そしてもう一度あらすじを読みました。気付かされたのは、この三位一体的な構成により芥川龍之介の「魂の文学」への「共観」と「共感」へと導かれたことでした。あらすじは読書の前と後で、二度オイシイ！ さて、説教のあらすじは……。
次は、『あらすじで読む現代』キリスト教文学』の出版を待っています。

(四六判・一六〇頁・定価一七六〇円・日本キリスト教団出版局)

日本キリスト教団出版局
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
E-mail eigyou@bp.uccj.or.jp (価格10%税込)
<https://bp-uccj.jp>

クエーカー神学の精髓を伝える

〈評者〉 岩井 淳



真のキリスト教神学のための弁証

ロバート・バークレー著
 リシア・キュニング編
 中野泰治訳



例えて言えば、本田技研工業の創業者・本田宗一郎と「名参謀」として知られた副社長・藤沢武夫のような関係だろうか。前者のカリスマ的な創始者が、後者による体系化や組織化の労によって支えられ、後者なくして前者の発展は不可能だった。初期クエーカーにおけるジョージ・フォックスとロバート・バークレーの関係も、そのようなものであった。クエーカーは、一六五二年頃にカリスマ的な指導者フォックスによって創始されたが、この教派は、フォックスの支持者にして年下の友人バークレーの尽力がなかったら生き残れなかっただろう。

しかしながら、従来の研究はフォックスなど草創期の指導者を強調することが多く、バークレーの研究は必ずしも盛況ではなかった。こうした状況にあつて、クエーカーの存続に大きく貢献したバークレーに注目するのが本書の訳

者・中野泰治氏である。中堅のクエーカー史家である中野氏は、これまでバークレーを中心に研究を進めており、『クエーカー入門』（新教出版社、二〇一八年）という書物の訳者としても知られる。

原書は、王政復古期の一六七六年にラテン語版で、七八年に英語版で出版された。本書は、一六七八年の英語版を忠実に再現した二〇〇二年版を底本としつつ、バークレーの議論が難解であることを考慮して、本文の横に解説を付した一九〇八年版を参照して、訳出された。理にかなった原書の選択であろう。本書では、バークレーの込み入った議論を分かりやすく伝えようとする工夫が施されている。ただ、地の文と「」や「」で示された訳者の説明が入り組んでいて、少し読みにくいので、適宜、訳注方式をとることも一つの選択だったかもしれない。



傷によつて共に生きる

日本キリスト教団
愛川伝道所牧師
北口沙弥香

不肖の「師匠」富田正樹、大いに推す！
自分を何処に置くか、何処から見られるか、まったく変わってくる福音書の風景！ 自身の持つ傷、残り続ける傷によつて互いに共感し、共に苦しむ、共に歩む。「セクシャル・マイノリティ」で二足のわらじ稼業の牧師による魂の説教集。
最新刊！ 新書判・二四四頁・一四三〇円

『真のキリスト教神学のための弁証』には、クエーカー神学の精髓が記されている。その要旨は以下の六点にまとめられる。第一に、すべての人は全的に墮落しているが、第二に、すべての人には、キリストの死による贖いによつて信仰の基盤として「内なる光」が与えられる、第三に、自己を否定し無となる時に「内なる光」の働きかけがある、第四に、「内なる光」の最初の働きかけは罪を明らかにすることである、第五に、その働きに逆らわなければ、救いに与ることができ、第六に、救いに至った者は、この世で聖なる生活を送らなければならず、平和をつくりだす神の民として生きることが求められる。こうして体系化されたクエーカー神学は「内なる光」と「聖性の追求」という二つを核心として、その後も展開した。特に後者は、奴隷



少女の命・女性の命 嵐の中から新たな命

九州教区協力司祭
吉岡容子

新書判・一九二頁・二二〇円
新約聖書学 青野太潮氏すいせん！
聖書は答への書ではなく問いの書。疑い、問い、詰め寄り、ぶつかっていく。誰に？ そう、神・あの方に。その時巡り始める新たな命の胎動を信徒と共に見つめてきた一司祭の魂の説教、十五編「治療されること」と「癒されること」は同じでしょうか、と。

解放運動や監獄改善運動といった社会活動にクエーカーが立ち向かう原動力となったのである。
このように、現在に至るまでクエーカーを支えた神学的基盤がパークレーによつて与えられた。これまでパークレーの思想は、フォックスなどと比べて、あまり注目されなかったが、本書の登場によつて適切に参照することが可能となった。この点は本書の最大の意義であろう。また、パークレーの議論はキリスト教の多彩な歩みを背景に説かれており、クエーカーだけでなく、キリスト教の思想や歴史に関心を持つ読者にも訴えかけるものがある。訳者の労を多としたい。
(いらい・じゅん 静岡大学名誉教授、日本ピューリタンリズム学会 元会長)

(A5判・五二〇頁・定価六〇五〇円・三恵社)

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
出版の手引き / 呈 (税込)

福祉事業の発展を ユダヤ教の視点から捉えなおす

〈評者〉金澤周作



ユダヤ慈善の近代化
田中利光著



有史以来（あるいはそれ以前から）現在に至るまで、あらゆる文化圏には、どのような概念や用語で表現されようとも、いわゆる「慈善」に相当する思想や実践（他者のため、物質的対価なき援助）が遍在している。しかし、カナダで表記される「チャリティ」はキリスト教と不可分に結びつくし、日本における仏教などに由来する「慈善」的行為は相対的に目立たないので、多くの本誌読者にとって、慈善といえばキリスト教のようにイメージしてしまうのではないか。また、篤志者の（不安定な）浄財と気持ちに基づく慈善の時代は過去のもので、今や国民の（安定した）税と計画に基づく国家福祉が常態化しているのだから、慈善について何か前近代的な印象を持つ人も少なくないだろう。こうした二重の臆見をただし、より深い世界の実像に迫る研究をしてきたのが、著者田中利光氏である。

田中氏の原著『ユダヤ慈善研究』（教文館、二〇一四年）は、慈善のキリスト教イメージを相対化する業績であった。キリスト教がそこから分かれ出たユダヤ世界における慈善の思想と実践を、長い歴史の変遷を踏まえてそれ自体として究明したことで、神の正義を表す行為としてのユダヤ慈善（ツエダカー）は、神の愛を表す行為としてのキリスト教慈善（チャリティ）と対置され、両者の系譜や関係や差異について、鮮やかな像を提供した。続編としての本書は、四つの章と充実した資料編によって、慈善の「近代化」を検討対象に据え、先の臆見の二つ目に挑んでいる。

主たるフィールドは、一九世紀後半から二〇世紀初頭のアメリカ合衆国である。この時期、アメリカは、ヨーロッパ、とくに東方で迫害されたユダヤ人が大挙して逃れてきた地であり、無数のユダヤ人コミュニティを育んだ。各地

に同胞ユダヤ人の窮状を救うための慈善団体が叢生した。ヘブライ共済会やブネイ・ブリットの沿革と初期の活動を概観した上で、著者は一九世紀末におけるユダヤ慈善の組織化（アンブレラ組織による各地の既存団体のゆるやかな統合）と、その流れの中で先駆的に設立された全米ユダヤ女性評議会（一八九三年）に注意を促す。そして、同評議会の創設者ハンナ・ソロモンと、その支持者で後に委任統治期のパレスチナで難民青少年ユダヤ人（ユース・アリアー）に対する福祉活動を展開したシオニスト、ヘンリエッタ・ゾールドという、共に改革派ユダヤ教徒家系の傑出した女性の生涯を、彼女たちの活動を可能にしたユダヤ人ネットワークのなかで辿る。また、二〇世紀初頭にソーシャルワーカー養成のための教育機関ができていく潮流の

中に、ニューヨークのユダヤ公共事業学校を位置付ける。慈善団体の組織化と、女性のリーダーとしての活躍、そして科学的ソーシャルワークの生成は、いずれも慈善の「近代化」の重要なメルクマールであり、それらを指摘したことで本書の目的は達成されている。禁欲的な文章ゆえ、当時のユダヤ人のおかれた社会的、経済的、政治的な状況や、キリスト教のそれを含むチャリテイ界の動向、女性の社会進出や、宗教やNGOのトランスナショナルな展開など、各種の具体的な背景の説明がもつとあれば、と思わないではないが、いずれにせよ、現在に息づく「慈善」を複眼的にとらえる視座の一つを提供する、貴重な本である。

（かなざわ・しゅうさく）京都大学大学院教授
（A5判・一七〇頁・定価三三〇〇円・教文館）

神学ダイジェスト136号

急速な変化を遂げる現代社会。その中において、多様な価値観に直面するキリスト者。本誌は海外の神学動向を紹介しながら、現代人のかかえる信仰への真摯な問いに光をあてる。

2024年6月発行
A5版128頁
定価638円（税込）

特集 キリスト教ヒューマニズム
巻頭言 キリスト教ヒューマニズム
イグナチオ的教授法―ヒューマニズム+ T:ツイマーマン
キリスト教、人間中心主義、エコロジー危機 A:ラル・ドウェット
K:ラーナーとキリスト教ヒューマニズム A:ラップフェルト
教育と神学の関わり J:C:マーレイ
トラーと人権 R:ネックスラー
ヘブライ語聖書における戦争 T:レーマー
コ罗纳禍における社会教説の忘却 S:フオンタナ
女性助祭についてのシンドスの識別 P:ザガノ
好評連載「典礼参加へと招かれて」「私は思ったより大丈夫」

上智大学神学会
神学ダイジェスト編集委員会
東京都練馬区上石神井4-32-11
〒177-0044 Tel & Fax (03) 3594-4349
E-mail shing-dt@netjoy.ne.jp

キリスト教界への 新たな信仰の提言

〈評者〉 小林孝吉

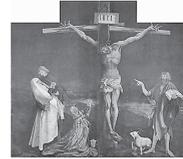
著者は、内村鑑三を創始者とした無教会信仰の水脈に連なり、無教会・駒込キリスト聖書集會を主宰し、個人伝道誌『十字架の祈り』を主筆として発行する独立伝道者である。一人の伝道者として、聖書に救済を求める信徒と共に生きることで、それは「弱さ」のままに受難の十字架について人・イエスの苦しみをもとに、信仰者の傷み^{いた}を人格的に受容しつつ、時代と社会の「強さ」を求める風圧のなかで、無条件の神の愛をありのままの自己が受け入れ、信仰の「正気」、また「多様性」でもあろう。

本書には、二〇二三年無教会全国集會聖書講話で、著者の最初の「義認信仰」の表明となった「私は福音を恥としない」を巻頭に（第一章）、「贖罪信仰から信仰義認へ」（第二章）、「無教会の信仰における断絶と継承」（第三章）から「信仰義認から義認信仰へ」（第九章）と、贖罪信仰

無教会の变革

贖罪信仰から信仰義認へ、
信仰義認から義認信仰へ

荒井克浩



教文館

無教会の变革

贖罪信仰から信仰義認へ、
信仰義認から義認信仰へ

荒井克浩著



との訣別から義認信仰へと至る決定的な信仰変転のドラマが、二〇二一年一月から二年間（今井館建設移転の前（後））に主宰誌に掲載された聖書講話等の文章として収められている。これに新たな書き下ろしとして、「『贖罪信仰』の底を割ってその先へ進む」（第一〇章）を加えて、著者における「無教会の变革」への問題提起が実験的に描きだされている。そこには、「十字架につけられたままのキリスト」＝「罪となった神」と共に生きる、一伝道者の姿が見えてくるであろう。その姿は、信仰者の神証言をたどった最相葉月『証し』^{あか}において、「信仰の新たな旅立ち」として注目された。この贖罪信仰から義認信仰への旅路は、青野大潮氏の十字架・パウロ理解、大貫隆氏の贖罪信仰の起源と変容などの新約学の研究に支えられ、作家椎名麟三やシモーヌ・ヴェイユへの信仰義認的な共感も底流する。

特集

別冊 Ministry

教会が教会であるために 声にならない声に訊け

満を持して、「あの」雑誌が帰ってきた――。



雑誌「Ministry」が2009年に創刊して15年。地方教会で奮闘する次世代の教会者を応援したいという当初の志に立ち返り、コロナ禍の危機を経てなお教会内外に蔓延する「声にならない声」に今一度耳を傾ける。

- 「サバイバー」たちの鎮魂歌
- 実践講座「ざんねんな言葉集」
「安心できる共同体になるために」
- 鼎談「牧師のタマゴ未来会議」
- 「ハタから見たキリスト教」
松谷創一郎（ジャーナリスト）

B5判・72頁、定価1,650円(税込)

キリスト新聞社 since 1946

169-0051 東京都新宿区新小川町9-1 4F
03-5579-2432 support@kirishin.com

ここでは著者の師・高橋三郎の絶筆「パウロの限界」も、「贖罪信仰の限界」としてとらえ直されているのだ。

著者は、総論となる第一章のなかで、人は十字架の贖罪信仰ではなく、神の愛によって無条件に救われ、義とされる信仰が起こされる（＝義認信仰）といい、次のように語る。

「救いとは、弱さから強さに変わることではありません。愚かで弱い者が、愚かなまま・弱いままで、無条件に神に受容され救われることなのです。……真の復活とは、愚かなまま・弱いままで強められることなのであります」。本書には「イエス・キリストの真実」（聖書協会共同訳）＝「神の賜物」としての「ピステイス」（信仰）が全章を貫き流れている。

本書は、内村鑑三の贖罪信仰の刻まれた無教会への、広

くはキリスト教界へも、大きな課題の提起となるであろう。その帰趨は、無教会にとっては揺るがせにできない関心事である。そこから「万人救済論」への一条の希望を見ることのできるであろうか。それは、私たち自身に問われているのだ。著者は、「あとがき」に、こう記している。「私が本書で書いてきたことは『全ての人はすでに救われている』ということである。一人残らずである。……勝利者キリスト。私はこの言葉を廃棄しようと思う。そして次の言葉を語りたい。共なる神——インマヌエル」と。

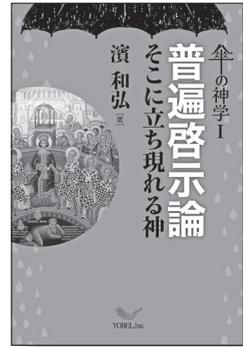
インマヌエルなる神の愛の声は、すべての人が、希望とともに歩むべく、いつも呼びかけてやまない。本書には、その呼び声と響き合う著者の信仰が木霊こだましている――。

(A5判・三三六頁・定価一九八〇円・教文館)

(こぼやし・たかよしⅡ文芸評論家)

闇夜で触れた神の存在への探究 …新・普遍啓示論の誕生

〈評者〉 阿部善彦



傘の神学Ⅰ
普遍啓示論
そこに立ち現れる神
濱 和弘著



「傘の神学」と題する本書は、筆者の神学的挑戦から生まれたものであり、前著『人生のすべての物語を新しく…シエルターの神学から傘の神学へ』（教文館、2020）をふまえながら、神の存在を普遍啓示論として問い直している。

個人的なことを言えば、立教大学に勤めるようになって属格の神学という言葉があることを知った。それまでずっと哲学科・哲学研究科で勉強してきたため、教派教団の看板を背負って神学する人たちの苦勞というのもよくわからなかった。他方、筆者は、教団内で経験を重ね、教義にかなする重要な役目を担う立場にありながら、所属する教団の教義的柱である「罪の赦しの福音」の限界―それは本書が示すように西洋近代キリスト教全体の根源的欠陥に通ずる―を正面から指摘し、それを克服する神学を提示する。

筆者のその捨て身の挑戦は救いのよきたよりを必要とする人たちに「福音」を十分に届けえなかったという宣教者としての反省に裏付けられているが、それはただ教勢（統計）を見つめた机上の反省ではない。筆者は自らにとって神が何であったのかを、取り繕うことなく、丸裸になった誠実さ（エメト／アレーティア）によって求道的に問い直す。神とは何か。それは偶像である。人は神ではなくこの世とこの世の栄光に絶対的信をおいて生きている。この偶像が破壊されないかぎり生ける神との出会いはない。このテーマは、民の繁栄の約束である我が子イサクを神にささげるために刃物を手にしたアブラハムの苦悩をはじめ、ヘブライ語聖書で人と神のかわらぬ真理として繰り返し現れる。偶像が崩壊する時、人はそれを試練と呼ぶ。筆者にその時は東日本大震災の直後に生じた。想像しがたい苦しみと

悲しみに打ちのめされた人たちを前にした筆者から、神の存在を語る言葉が奪われる。神の存在を語る神学も説教も不可能となった筆者がこの世で目にするものから受けとったただ一つの言葉は「神も仏もあるものか」であった。

しかし、目に映るこの世界に神を見出せない信仰の暗夜の中に落ち込んだ時に「全身を貫く神御自身の（わたしはある）」という言葉によって、筆者は肉身のいのち内部で生ける神と出会い直す（8頁）。いのちの内部で、この啓示によって神御自身のいのちに触れた筆者は、その信仰の暗夜―既存の神学と説教の不可能性―の内部で（わたしはある）」と御自身を与えてくださった方の存在を手探りで追う。

本書の言う普遍啓示とは、筆者に「わたしはある」と御自身を与えた方が全人類・全世界の創り主、救い主であり、

キリスト教以前より御自分を普遍的に―諸宗教と諸文化において―啓示してこられたということである。確かに「啓示」は概念的にもキリスト教に先立ち、独占されない。

キリスト教の唯一絶対性は、諸宗教と諸文化の独善的排他的な否定・拒絶ではなく、全歴史を貫くこの普遍啓示の究極的完成―あまねく御自分を示される神にだれもが出会うこと―にある。それゆえ本書の普遍啓示論は救済論かつ宣教論でもある。だれもが神御自身のいのちに触れ、受肉された御言葉・キリストと聖霊によって「アッバ、父よ」と呼ぶ霊に満たされて「ただひとりの父、天におられる父」と出会うために生み出され、招かれている。傘の神学にさらに学びたい。

（あべ・よしひこ 立教大学文学部教授
四六判・二二四頁・定価一九八〇円・ヨベル）



アジアの視点で読む ルターの小教理問答

J・P・ラジャシエカー 編著
宮本 新訳

●四六判並製 定価二〇〇円

本書は、アジアを背景に持つ六名の神学者によって、ルターの小教理問答をアジアの視点で文脈的に読んだものである。アジアの現実、特に宗教多元主義、また教会が直面している幅広い社会問題（貧困、家長制、不平等、生態学的危機）を考慮しつつ、教理問答の意味と重要性を再認識するための試みでもある。

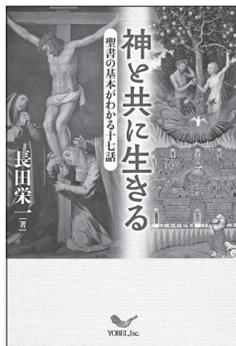
ISBN 978-4-86376-096-7

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区神田三崎町2-9-5-402
☎ 03-3238-7678 FAX 03-3238-7638

広大な「聖書の森」を貫く道 「神と共に生きる」で提示

〈評者〉鎌野善三



神と共に生きる

聖書の基本がわかる十七話

長田栄一著



親しい間柄の長田先生の著書を読ませていただきました。一読して、聖書の中心的メッセージがよくわかりました。あの分厚い聖書を、よくもまあ、128頁の小さな本にまとめられたものと、驚いたことです。広大な「聖書の森」を貫く一本の細い道が分かりやすく記されています。信仰歴の長い方は「なるほど、聖書全体がつながっているのだ」と膝をたたき、教会に来て問もない方は「この道にそって聖書を読めば難しくないと安心されるに違いありません。」「聖書の基本がわかる十七話」という副題でわかるように、旧約聖書から四話、福音書から八話、使徒の働きから二話、書簡から二話、そして黙示録からの一話で完結します。これらはすべて、「神と共に生きる」というテーマで貫かれています。この十七話をできるだけ短くまとめてみましょう。

神が人間を創造されたのは、彼らが「神と共に生きる」ためだった。十戒は「神と共に生きる」ためのガイドラインだったが、人間はこれを守らなかった。そんな人間を回復させるために、神は「不思議な男の子」と預言された方を地上に遣わされた（以上旧約聖書）。

この方こそ、「ひとり子の神」なるイエスであり、人間と共に生きたいという神の願いを実現される方だった。この方は、「私たちを愛し、私たちと共にありたい、私たちにご自分を現したいと願っておられる」（43頁）。この方の愛にとどまるなら、私たちの生涯は豊かな実を結ぶことになる。福音書はこの方のことばと行いを記録し、特にその十字架と復活によって罪の贖いが完成したことを宣言する。昇天によって肉眼では主を見ることができなくなったが、「世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます」と

いう約束が残された(以上福音書)。

その約束の成就として聖霊が与えられ、神に対する悔い改めと主イエスに対する信仰を告白するなら、だれでも神と共に生きる新しい生涯を始めることができる(以上使徒の働き)。これらの人々の集まりが教会であり、「他の信仰者と共に生きていく」(107頁) ことよってキリストのからだが形成され、神の臨在が現される「神の御住まい」となる。神との隔てなき交わりと信者同士の交わりによって、光の中を歩む日々が実現する(以上書簡)。やがてキリストが再び来られるとき、「神は人々とともに住み、人々は神の民となる」新しい天と地とが出現し、神のご計画は完成する(以上黙示録)。

聖書の森には何千本という木々が茂っており、どの木にも深い意味があるのですが、そこには深入りせず、「神と共に生きる」という一本道をたどっていく著者の意図は明確です。「できるだけ分かりやすく、しかし、できるだけ聖書の内容をありのままにお伝えしたい」(4頁) という願いは見事に実現しています。

最後に、著者の人となりが表れている三つの点を記してみましよう。

1 純粹な信仰 著者は牧師家庭に生まれ、幼いころか

ら両親や教会員の祈りに支えられて成長してきました。そのことが、聖書全体を「神のことば」と受けとめる純粹な信仰を養ってきたのでしょう。「神と共に生きる」ことが、著者の生活に表れているように思われます。

2 分かりやすい例話 難しい話はあるえて持ち出さないで、新島襄の言葉、ゴーギャンの絵、映画『十戒』、水野源三の詩などの親しみやすい例話によって、聖書の真理を説明しています。できるだけ分かりやすくしようとする著者の気持ちが伝わります。

3 実際の経験 財布を忘れたこと、救いの証し、教会学校の生徒の話など、自分が経験したことを通して、現実に働いておられる神さまのみわざを描いています。教会に来て間もない方々にもきつと分かりやすいことでしょう。

(かまの・よしみ 西宮聖愛教会牧師)
(四六判・一三六頁・定価一五四〇円・ヨベル)

※編集部より 前号の「シリーズこの三冊!」にて取り上げた書籍の三冊目、『弱さ』の向こうにあるもの』の著者名を「木下活信」氏とご紹介しましたが、正しくは「木原活信」氏です。大変失礼しました。訂正してお詫びします。

既刊案内 (2024年4月～2024年5月)

編・著・訳者	書名	判型	頁	定価(税込)	版元	発行日
ブッカー・T・ワシントン著 佐柳文男、佐柳光代訳 大森一輝解説	奴隷より身を起して ——ブッカー・T・ワシントン自伝	四六	270	2,860	新教出版社	4/18
皆川達夫著 樋口隆一監修	皆川達夫セレクション 宗教音楽の手引き	四六	128	1,540	日本キリスト教団出版局	4/19
三浦綾子文 おちあいまちこ写真	三浦綾子 祈りの世界	A5変	80	1,540	日本キリスト教団出版局	4/25
ケリッサ・スタート・デヴィッドソン著 久野牧訳	ナチズムと闘った牧師 ——神の人マルティン・ニーメラーの物語	A5	316	3,740	一麦出版社	4/19
深谷松男	福音主義教会法と長老制度	A5	226	3,520	一麦出版社	4/29
大頭真一	牧師・大頭の「焚き火」日記	四六	168	1,430	キリスト新聞社	4/22
オリゲネス著 小高毅訳	キリスト教古典叢書 諸原理について (ペリ・アルコーン)	A5	534	8,580	教文館	4/24
長田栄一	神と共に生きる ——聖書の基本がわかる十七話	四六	134	1,540	ヨベル	4/25
山田耕太	携帯版 Q 文書	新書	190	1,650	ヨベル	4/26
高田春彦	オルガン曲集 続・やさしい 讃美歌前奏曲&「エリヤ」の テーマによる奏楽曲他	A4	52	2,200	日本キリスト教団出版局	5/7
柳下明子編	信仰生活ガイド 祈りのレッスン	四六	128	1,540	日本キリスト教団出版局	5/17
名古屋学院大学 キリスト教センター編	「敬神愛人」をめぐる系譜と群像 ——「建学の精神」の源泉を たずねて	A5	296	4,400	日本キリスト教団出版局	5/20
濱和弘	傘の神学 I 普遍啓示論 ——そこに立ち現れる神	四六	224	1,980	ヨベル	5/9
松木充	聖霊による福音宣教 ——使徒の働き連続説教	四六	374	1,980	ヨベル	5/22
E. ユンゲル著 佐々木勝彦訳	義認の福音 ——エキュメニズムを目指す 神学的研究	A5	386	5,390	教文館	5/15
須藤英幸	ルターの恩恵論と「十字架の神学」 ——マルティン・ルターの神 学的挑戦	A5	302	4,620	教文館	5/22
焼山満里子	主の来臨を待ち望む教会 ——Iテサロニケ書論集	A5	166	2,750	教文館	5/24
滝沢克己協会編	滝沢克己の現在 ——没後40年記念論集	四六	358	3,740	新教出版社	5/16
クリス・グリノフ著 薄井良子訳	クイア神学入門 ——その複数の声を聴く	四六	302	2,970	新教出版社	5/24

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jb-shop.com	sasaki@jb-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用		zenrikan_system_0530@yahoo.co.jp	02350-0-874
エッセイの木	980-0012	仙台市青葉区錦町1-13-6 エマオ1F	022-223-2736	022-302-6678	https://sendaicbs.uccj.jp/	info@sendaicbs.uccj.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区新館2-2 千葉カリスチャペルビル	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vestia.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
待晨堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taishindo-books.jimbo.com/	taishindo@ej.com.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス南青山	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3567-1995	03-3567-4435	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
東京キリスト教書店	162-0814	東京都港区新小川町9-1日キ坂内(外販専門)	03-3260-5663	03-3260-5637		tokyo@nikkiban.co.jp	00130-3-60976
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.lighter.jp/~yokohamacs/index.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	466-0045	岐阜市瑞穂区瑞穂16日本キリスト教団瑞穂会館	052-680-8090	052-680-8091	http://nagoya-seibunsha.la.coccan.jp/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834	http://web.kyoto-net.or.jp/people/kjordan/	kjordan@mbox.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0013	大阪市北区茶屋町2-30	06-6377-6026	06-6377-6027	http://osekacbs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三陽ビル2F	078-331-7569	078-945-9388		kobex@nikkiban.co.jp	00170-2-421390
広聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
リバーサイドブックス	779-1105	徳島県阿南市羽ノ浦町古庄大道ノ西13	090-8694-4986	050-3142-3017		ykwb3@gmail.com	16220-17974891
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一乃町1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.gojocs.jp/roshiyama_1007/index.html	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用		k-haleruya@bible.or.jp	00160-2-18410
沖縄キリスト教書店	904-2143	沖縄県沖縄市知花4丁目12-33	098-927-0220	098-938-1102	https://www.okinawacbs.net	info@okinawacbs.net	01790-4-152916

※一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

福音と世界

2024年8月号

特集1 戦争を起ささない責任

寄稿者 鄭址錫、栗原茂、斎藤小百合

特集2 地域事業の拠点としての教会

寄稿者 李省展、佐々木炎、山本光一

ウクライナ戦争即時停戦論とドイツのキリスト教会2 (川田洋) / 好評連載 女たちの闘い—村上千代さん、証言としての旧約聖書(田島卓)、「日本のキリスト教」を読む(山口陽)、新約釈義ルカ福音書(山崎ランサム和彦)、他

A5判・定価660円・〒70円

定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148

Email: sales@shinkyoy-pb.com

編集室から

き込まれてしまい、毎話欠かさず視聴している。

しかし、本屋の特設コーナーに平積みされた源氏関連本を眺めながら、ふと考えてしまった。この中の本を実際に買う人はどれほどいるのだろうか。もっと言えば、ドラマから興味を持った人のうち、いったい何人が源氏物語を読破するだろうか。今はSNSなどでも歴史や出典の解説が即座にアップされるので、それらを見ればドラマの背景を理解したと思っただけで満足できてしまう。書籍から情報を得る

予告

本のひろば

2024年9月号

本・批評と紹介

(巻頭エッセイ) 佐々木潤(特集)「エコロジの視点から聖書を読むためのこの三冊!」 鬼頭葉子(書評/エッセイ) 大串肇著『VTJ旧約聖書注解・エレミヤ書1〜20章』(書評) 並木浩一著『ヨブ記を読もう』、オリゲネス著『諸原理について』、袴田康裕著『コリントの信徒への手紙二講解(下)』、ラインホルド・ニーバー著『道徳的人間と非道徳的社会』 他

人自体が減っている昨今、原典まで読み切る人はさらに少ないのではないかと。

キリスト教の関連書でも、宗教絡みの事件が起きたり、人気映画で聖書に由来するモチーフが登場したりと売れ行きが伸びることがある。けれど、そのときの読者がその後聖書を通読し教会に通って洗礼を受けた、というケースはあまり多くないだろう。それでも文書伝道が最終的に目指すところはそこであり、たとえ一時的なブームであっても、一人一人の読者のうちに信仰の種をまく助けになるようなものを作っていきたいと思う。

……と書いてきたが、かくいう筆者自身、にわかに興味が出て現代語訳付きの源氏物語全集を通販サイトで検索したものの、調べたところで止まっている状態だ。五十四帖長い……もうちょっと考えます。(豊田)

内村鑑三問答

7月10日

鈴木範久著 70年にわたり内村と向き合い続け、内村研究を主導してきた著者が、「なぜ最初の結婚は破綻したのか」「天皇をどうみたか」など、更なる解明を要する24の「謎」を取り上げ、その人格と思想に迫る。巻末に、著者が現時点で最も正確と考える年表を付す。

◆四六判・定価2970円



クイア神学入門

その複数の声を聴く

クリス・グリノフ著／薄井良子訳 ジェンダーやセクシュアリティの点で非規範的であることを意味する「クイア」。その基本的な諸概念を平易に解説すると同時に、クイアと向き合う多様な神学的冒険の歴史、および最前線の議論を紹介する。

◆四六判・定価2970円



滝沢克己の現在

没後40年記念論集

滝沢克己協会編 「純粹神人学」とは何か。滝沢が最晩年に欧州の神学界に問おうとした思想は、没後40年を経て今なお読む者を魅了し、挑発し続ける——それに応答する14名の渾身の論考を収録する。

◆四六判・定価3740円



旧約聖書

物語としての歴史

好評既刊

B・W・アンダーソン著／高柳富夫訳

1957年の初版以来5度におよぶ改訂を重ね、今日にいたるまで半世紀以上も旧約入門書として絶大な信頼を得ている名著。歴史的研究、考古学的調査、文学批評、聖書神学をひとつの「物語」に編み込み、800頁を超える大著ながら、読者を巨大で複雑多様な旧約の世界にぐいぐいと引きずり込む。

◆A5判・定価7920円



ロゴセラピーと物語

フランクルが教える〈意味の人間学〉

勝田茅生著 (NHK「こころの時代」講師) ◆B6変型判・定価1760円

フランクルの創始したロゴセラピーの中心メッセージを、民話や寓話を例にとりながら分かりやすく説き明かす。著者はNHK「こころの時代」[ヴィクトール・フランクル]の講師(2024年4月～9月、第3日曜日/同週土曜日放映)

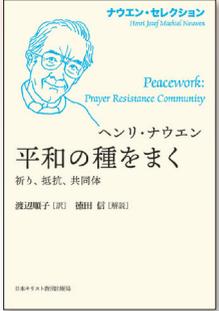
一挙2点
重版出来!



ロゴセラピーのエッセンス 18の基本概念 ◆B6変型判・定価2090円

フランクル著／赤坂桃子訳 『夜と霧』英語版に著者自身が付けたまたとない解説。

平和聖日の準備に最適。あのナウエンが平和について語る!



ナウエン・セレクション 2024年7月11日刊行予定
平和の種をまく 第6回配本
 祈り、抵抗、共同体 ヘンリ・ナウエン
 ◆四六判 並製・192頁・定価2,420円 渡辺順子 訳 徳田 信 解説

「平和をつくる者とならずにキリスト者でいることなど、誰にもできない」とナウエンは断言する。今こそ私たちは、イエス・キリストに従う者として、「恐れの家」を出て「愛と平和の家」へと歩みだそう。20世紀を代表する霊的指導者ナウエンが、平和のつくり方を論じる注目書。

シリーズ好評発売中

『今日のパン、明日の糧
 —暮らしにいのちを
 吹きこむ366のことば』
 定価2,640円

『アダム — 神の愛する子』
 定価2,200円

『死を友として生きる
 —「最大の贈り物」&「鏡の向こう」』
 定価2,420円

『傷ついた癒やし人 新版』
 定価1,980円

『老い—人生の完成へ』
 定価1,980円



牧師・幼稚園園長の著者が日常における気づきを紡ぐエッセー集

たからさがし
 神さまからの不思議なおくりもの

望月麻生
 2024年7月23日刊行予定

たからのありかは、極めてありふれた日常に。『信徒の友』の「みことばにきく」などの連載記事16本を大幅に加筆修正し、書き下ろし8本を加えた気づきと癒やしの珠玉エッセー集。安らぎと希望にあふれた本書は、お見舞いや訪問時のプレゼントにも適している。 ◆四六判 並製・120頁・定価1,540円



本のひろば.com



一九五七年七月一日 第三種郵便物認可
 二〇二四年八月一日発行 (毎月一回) 二〇二四年八月号

発行所 〒163-0814 東京都新宿区新小川町九-1 一般財団法人キリスト教文書センター
 電話 03-3361-6520 振替 0017-0017-5170
 発行人 金子和人 編集人 村上信児 印刷所 モリモト印刷
 日本キリスト教書販株式会社 電話 03-3361-5670

定価七八円(税抜七一円) (¥63円)
 一年分一三〇〇円(送料共)